

『実例詳解古典文法総覧』補遺稿

連載第 31 回 第 8.4 節～第 8.4.1.3 節

2019 年 4 月 1 日

小 田 勝

「8.4 希望表現」の 233 頁の◆について。本書と同様、「シタイ」を「願望」、「シテホシイ」を「希求」とするものに、濱田敦（1948a, 1948b）がある。

「願望（シタイ）」と「希求（シテホシイ）」の区別については、絶対に混淆例がないとまでは言えないだろうが（§ 8.4.6）、この区別は無頓着な注釈書が散見されるので、やはりこの大原則は充分意識したい。例えば、

・秋の野は花の錦をもろともに立ち止まりつつ見てを行かなむ（元輔集）
について、『元輔集注釈（第二版）』に、「私どもも花見逍遥の人たちといっしょに立ち止まりながら見て行きましょうよ」とあるが、「私たちが花見逍遥の人たちと共に見て行く」のではなく、やはり「花見逍遥の人たちが私たちと共に見て行ってほしい」であろう。次例は逆に、「私達が、ほととぎすと一緒に泣き（鳴き）たい」と理解すべきであろう。

・あはれなること語らひてほととぎす諸声もろごゑにこそ泣かまほしけれ（多武峰少将物語）
また、

・都にてさいはひ来れば朝日山西ぎまにとくのぼりにしかな（相模集）
について、『相模集全釈』に「都に幸福が行くので、幸福と共に来る朝日は、朝日山のある西の地に、早く昇ってほしいものです」とあるが、「都に幸福が行くので、朝日が山に昇るように、私も朝日山のある西の方の都の地に、早く上りたい」である。同様に、

・ことさらに恨むともなしこのごろの寝覚ばかりは知らせてしかな（小大君集）
について、『小大君集注釈』に「格別にあなたを恨んでいるというのではありませんが、夜半目を覚まし悶々としているとだけは知らせてほしい」とあるが、「知らせてい」である。

233 頁「8.4.1.1 願望表現の句型」。「まほし」と「ばや」との違いは、前者が助動詞、後者が終助詞であることであって、従って後者は主文末にしか用いられない。

・[源氏ハ藤壺ノ許ニ] 常に参らまほしく、「なづさひ見奉らばや」とおぼえ給ふ。（源・桐壺）

なお、次のような「しかな」は、「過去の助動詞「き」の連体形＋終助詞「かな」」で、願望表現ではない。

- ・とどめたる心はなくていつしかと雪の上なる跡を見しかな(和泉式部統集) <詞書「雪のいたう降りたる暁に、人の出で行く跡あるに、つとめて言ひやる」>

235 頁「8.4.1.2 ばや」。用例(4)の類例を追加する。

- ・兵藤内これを見て、走り出でいかにもならばやと思へども(平治・金刀比羅本)
- ・「^{かうのとの}頭殿は思し召す旨ありて落ちさせ給ふぞ。ふせぎ矢射ばや。人々」と言ひければ(平治・金刀比羅本)
- ・おろかにもしやとたのみつつ、ながらへばやとせしかども(平家・屋代本・3) <「ながらへんとはせしかども」高野本>

「ばや」は願望(シタイ)を表すが、「あらばや」は例外的に、その存在への希求(テホシイ)の意を表す。

- ・かう思ひ知りけりと見え奉る節もあらばやとは思せど(源・早蕨) *←第 8.4.6 節用例(1)を削除して、ここに移動する。
- ・今様一つあらばや。(平家6・嗶声)

否定形「なからばや」も同様である。

- ・君も臣もかまへて人の嘲りなからばやと深く思し召されければ、御心ばかりは(=御心ノ及ブ限りハ)善政を行はれけり。(五代帝王物語)

235 頁「8.4.1.3 まほし・たし」。「まほし」「たし」は願望(シタイ)を表すが、「あらまほし」「ありたし」は例外的に、その存在への希求(テホシイ)の意を表す。

- ・げに千歳もあらまほしき御有様なるや。(枕 20)
- ・少しのことにも、先達はあらまほしきことなり。(徒然 52)
- ・家にありたき木は、松・桜。(徒然 139)

237 頁用例(15)のような「たがる」について、次例のような「たし」の補助活用形との識別に注意。

- ・近う参ッて見参にも入りたかりつれども、憚りもぞおぼしめすとて通りぬ。(平家 10・維盛出家)

[出典追加] 平家(物語) ④屋代本 = 『屋代本高野本対照平家物語』

[引用文献追加] 濱田敦 1948a 「上代に於ける願望表現について」『国語と国文学』25-2 / 同 1948b 「上代に於ける希求表現について」『国語国文』17-1